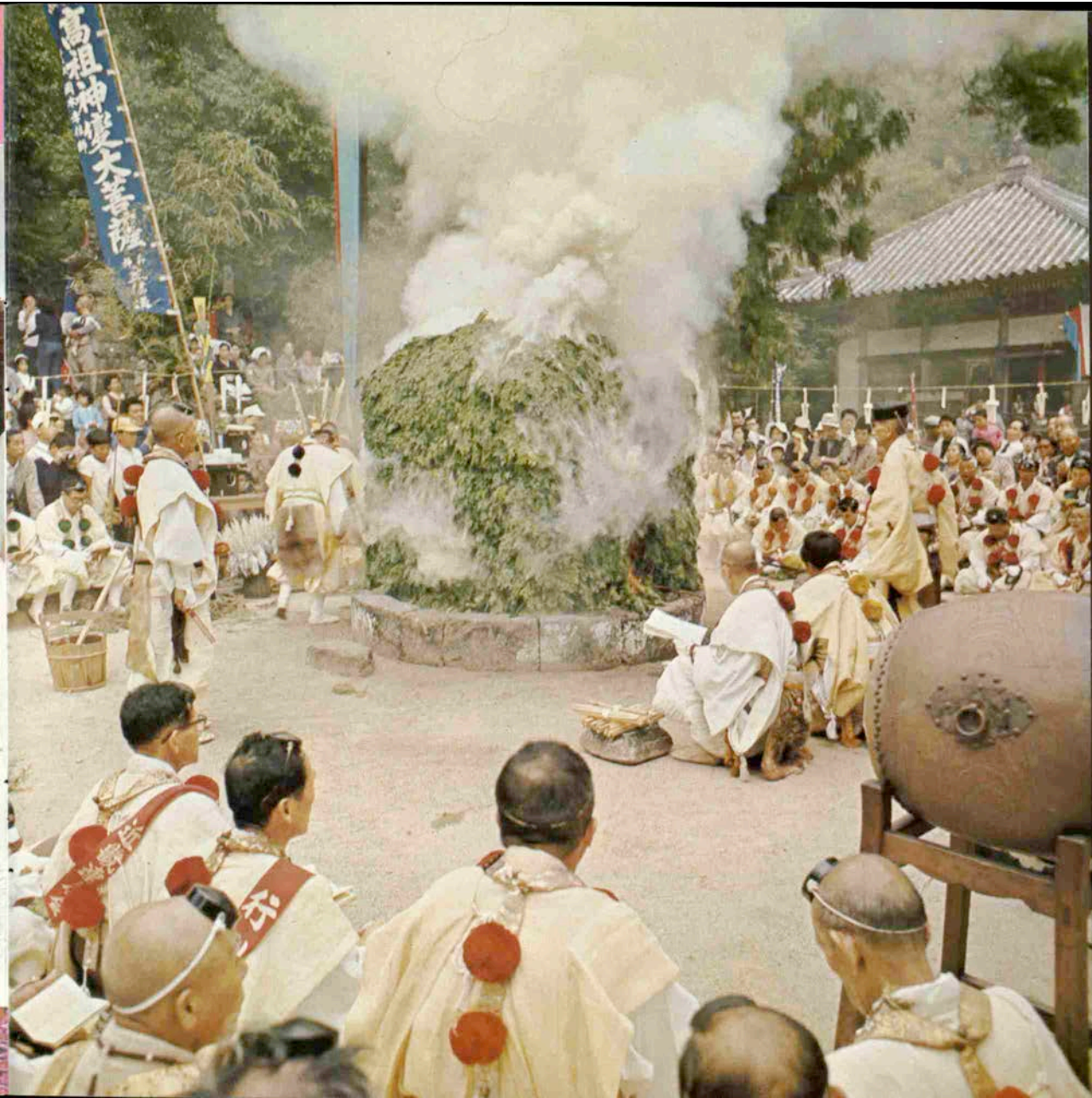


山伏の採燈大護摩法儀



●るぼるたーじゅ 北神戸をゆく〈12〉

伽耶院の「大護摩法儀」

黒部 亨／作家

播磨路や伽耶のみ寺のはなの庭
てらすは法のひかりなりけり

新西国二十六番詠歌にうたわれている大谷山伽耶院は、天台系の修験道寺院、すなわち山伏の寺として名高く、三木市志染町大谷にある。神戸の西北約二十四キロ、志染奥道より東北へ二キロはいった谷にあり、前後を山に囲まれた秘境は、山伏の修業場として最適の環境

となっている。

孝徳天皇の勅願寺として大化元年（六四五）法道仙人を開基として建立された。古くは大谷山大鑑寺といい、天和元年（一六八一）に後西上皇から勅により伽耶院の称号をたまわった。以来二百有余年、聖護院宮院家として覇を修験界にふるうことになる。

伽耶院の最盛期は平安中期。当時は堂宇数十、坊塔は

実に百三十余といわれ、

全員そろっての山伏の詠経。

花山天皇の行幸を仰いだこともあるが、天正六年（一五七八）から八年にかけて秀吉の播州三木攻めのとき、衆徒が別所方として羽柴勢に反抗したため、一山ごとく火にかかって焼失した。したがって現在約四千余坪の寺域内にある諸堂は、慶長十五年（一六一〇）の金堂再建を皮切りに、明石城主小笠原忠政、姫路城主池田輝政など、諸侯の寄進によって復興されたものである。

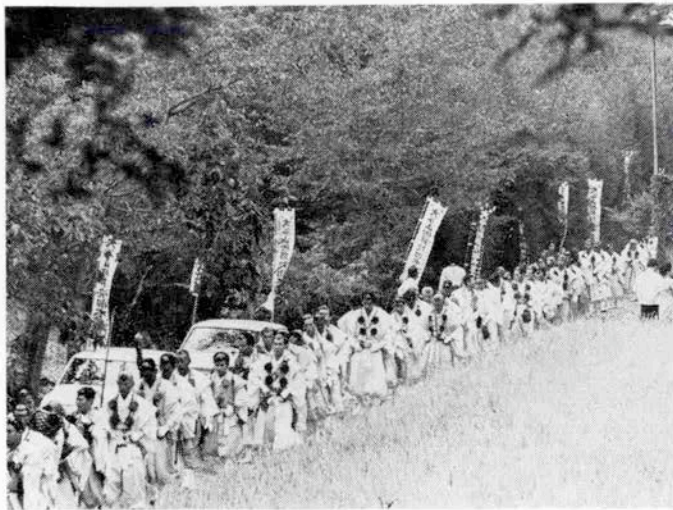
金堂は桃山様式といわ



れる単層寄棟造本瓦葺で兵庫県指定文化財。藤原時代末期の作といわれる本尊の毘沙門天木像は重要文化財。本堂東側にある鎮守三坂社は三間社流造一間向拝付で、その構造の精緻、手法の巧妙、形態の壮嚴さは、慶長年間
の建築美をあますところなく表現している。むろんこれ
も兵庫県指定文化財である。

ところで、伽耶院といえは、年に一度執行される探灯
大護摩法儀が何といっても有名で、大勢の山伏が参集し
て近畿地区最大の行事が行なわれる。毎年十月十日に催
されるのは、天和元年のこの日に後西上皇から伽耶院の
称号をたまわったからである。

午前になると、伽耶院の境内は山伏姿の修験者たち
と、この珍しい行事をひと目見ようと遠路はるばるやっ
てきた参観者たちでいっぱいになる。外人家族の姿も見
える。ざっと百五十人の山伏が畿内各地から馳せ参じて
いる。年輩者がほとんどだが、中に十代の少年山伏の姿
も見え、女性も二人ばかり混っている。



山門を出てから一列に並んで本堂へ向う山伏たち

その服装は、歴史ものの映画やテレビでおなじみの、
義経、弁慶の東北落ちのいでたちと思えばよい。はなや
いだ衣装の山伏たちが、樹々のわずかに色づきかけた境
内のあちこちに屯ろして、さながら映画撮影所のスタジ
オにまぎれこんだような気分である。

山伏とは、山野に起臥して修行するところから「山臥」
とも書く。また政治・軍事に関係したところから「山武
士」ともいう。山岳宗教と仏教との混合宗教とみなされ
る修験道の行者の別称で、山家と在家を問わず、山岳や
社寺の修行者を一般に総称している。修験道の開祖は役
小角。天台山伏と真言山伏の二派があり、伽耶院は天台
系である。吉野の大峰、金峰、熊野三山などの霊山で独
特の修行をする。周知のごとく山上が岳は大峰行者の修
行の中心で、山上には本堂、鐘掛岩、東ノ覗岩、西ノ覗
岩など、巨岩の絶壁を利用した行場が多く、古くから信
仰登山が行なわれた。

山伏の服装は独特である。出家でも有髪のまま袈裟、
鈴懸、兜巾を着けている。法螺、念珠、錫杖、笈のほか
に、山野の歩行に必要な縄、斧など、いわゆる十二道具
を持つ。腰にクマヤタスキの皮でつくった引敷をぶらさ
げている。僧がケモノの皮を身につけているのは奇妙だ
が、これは濡れた地べたに臥すときの敷物として好都合
なのだ。伝説によると文珠菩薩がイノシシにまたがった
からといわれているが、要するに深山幽谷を旅する行者
たちにはざぶとんがわりの実用品で、昔はカモシカの皮
をつかっていたという。

午後一時、いよいよ儀式がはじまった。

庫裏の庭に整列した山伏たちは「総礼」を終えてから
一列に並んで山門を出、法螺貝を吹きながら本堂の方へ
登って行く。この場合、階級の低い者が前になり、経験
の深い者ほど後ろに並ぶ。下位先進といっている。

山伏の階級ははっきりと分かれていて、胸に四つ、背
に二つ着けている房の色によってそれが示されている。



導師をつとめる伽耶院の岡本孝信師。出世大先達である。

の入口で双方とも威儀を正して行なわれる。たとえば……

答者（旅の山伏） 案内申、案内申。

問者（道場の山伏） 承け給ふ、承け給ふ。

旅の行者、住山何れなりや。

答者 摂州箕面の住、本修験宗配下の先達なり。

問者 今日当道場に來山の儀は如何に。

答者 本道場に於て天下泰

平、五穀成就、祈願の大護摩供ありと承はり馳せ参ぜしものにて候。同行列座に加へられんことを請ひ申す。

問者 聖護院門跡配下の山伏とあるからには、修験道の義、御心得ある筈。当道場の掟として一通りお尋ね申さん。

答者 何なりと御答へ申さん。

問者 そもそも山伏の二字、その義は如何に。修験道の義は如何に。

答者 山伏とは真如法性^{しんごはうしょう}の山に入り、無明煩惱^{むみょうぼう}の敵を降伏^{かうふく}するの義。修験道とは、修行を積みてその験徳^{げんとく}を顕はす道にて候。

問者 修験道の開祖は如何に。

といった具合で、合格すると「しからばお通りめされ」となり、法螺貝を吹き鳴らして道場にはいり、仲間に加わる。

護摩壇には、百五十貫もの松の青葉を積み上げた、高さ二米以上もある護摩木が組み立てられている。本来、丸太十六本で組み立てるが、細い丸太三十二本で組み立

この階級は、△峰入り▽の度数と密教修法を重ねることによって上位に進むという独特の仏教教義をもっている。若くて上位の者もあれば、老人でも下位の者がいる。行列の先頭は準先達（みず色）で、△大峰入り▽を三回経験した人である。以下、先達（みどり）、大先達（黄）、直参（茶）、参仕（紫）、出世大先達（赤）といったぐあいで、出世大先達になるためには四十数回の大峰入りを経験し、あるていど年功を経なければならぬ。なお、山伏の階級は腰にまいてある貝緒（ロープ）の色によっても示されている。

本堂の前で△本尊お勤め▽の儀式がすむと、つぎは△入道場▽で、山伏たちは護摩を焚く結界の中にはいっていく。方形の結界は石で囲まれ、その石が腰掛けになっている。山伏たちはその上に松の葉を敷いて腰をおろす。中央に石造りの円型護摩壇がある。

入道場^{にゅうだうじやう}のとき、有名な△山伏問答▽が行なわれる。山伏たちは乞食山伏、つまりニセ山伏をいちばん忌み嫌う。旅の山伏がやってきた場合、それがほんものかニセ物を問答によってたしかめ、合格すれば道場へ入れるし、不合格なら門前払いをくわせてしまう。問答は道場



山伏の吹く法螺貝の音が境内に力強く響きわたる



伽耶院の岡本道夫さん（左）から取材中の筆者（右）

てるのもあり、中にシバを入れて燃えやすくしてある。これだけ作るのに三人がかりで一日半かかるという。護摩とはもとサンスクリットのホマ（焼く、焚く）のことで。智慧の火で煩惱の薪を焼きつくすことを意味する。

今日の導師をつとめているのは伽耶院の岡本孝信師（78）で、むろん出世大先達。その子息道夫さん（36）が、マイク片手に参観者に解説する。高校の先生だけに、修験道の歴史的背景、山伏の生活と修行、さまざまな儀式の意味など、わかりやすく解説してくれる。

あとで同氏にいろいろご教示を願う。

何といっても山伏にとって最大の修行は、大峰山の「奥駆け」である。大峰山といえは、現在では一部禁制を解いてはいるが、古来女人禁制の修験道場として名高い。お山があくのは五月から九月までで、その期間中は全国から山伏の集団が大勢やってくる。

「日帰りもできますが、奥駆けとなるとちょっと苦行でしてね。わたしも何回か行きましたが、吉野、大峰山上、弥山、前鬼と、峰づたいのコースを四泊で歩くんです。大峰山上から弥山までが険路でしてね。足がガクガクして歩けなくなりますよ。山伏たちは「ヒザが笑う」といっていますからね」

吉野から新宮まで、紀伊山脈を二十一日間で縦走するコースもある。文字通り難行苦行で、朝は三時起床、四時出発。午後一時まで峨々たる山中を歩きづめである。

握り飯をほおばり、谷水

を飲み、山に臥し、岩をよじ登り、クマ笹を分け、六根清浄を唱えながらひたすら自己を凝視する。すべて自分のことは自分でし、人の力に頼らない苛酷な自己鍛練である。夜は必ず護摩を焚いて煩惱を焼きつくし、六時には夜露に濡れながら岩陰や樹陰にまどろむ。体力のほかに強固な精神力を要するゆえんである。

◇
大護摩法儀には、点火までにいろいろむずかしい儀式がある。

まず△法弓の作法▽がはじまる。法弓師が祭壇に進んで弓をとり、探灯師に一礼して護摩壇にむかって法弓の文を唱える。それが終わってから東、西、南、北、中央、鬼門の六方向に、それぞれ法弓の文を唱えてから白羽の矢を射放つ。道場を穢す悪魔を追い払うためである。

つづいて△法剣の作法▽が行なわれる。法剣師が護摩壇にむかって剣を抜き、「光」という文字の形に空を切



護摩の煙を浴びながら一心不乱に祈る老婆

る。法剣の文にもあるように「般若ノ靈威三摩耶形ノ利剣トナツテ一切衆生ノ諸々ノ戲論煩惱ノ敵を絶」するためである。

つぎが△斧振りの作法▽である。斧師が掛け声のもと大斧を振う。これは「探灯ノ薪ヲ執り、供養洗浴ノ水ヲ求ム」行事で、「壇木小木一切ヲ授与シ悉地成就セシメ給へ」と祈る。

それがすむと導師の願文朗読があつて、いよいよ点火。山伏全員の読経とともに、松の青葉がパチパチと音をたてて白煙をあげはじめる。境内に詰めかけている何百人もの参観者たちは、儀式のクライマックスを迎えて、厳粛な表情で眺めている。火はそれらの人々の煩惱や穢れを潔めながら燃えあがり、境内に聳える樹々の梢から空へと流れていく。

一見、格式ばった儀式の連続である。しかしその底を流れている精神は、深山幽谷の中で厳しく、しかも謙虚に自己を浄化していこうとする人間のねがいにほかならない。大自然の神秘は、人間の六根（眼、耳、鼻、舌、身、意）に生ずる穢れや醜さを、苛酷なまでにあばきだしてくれる。燃えさかる護摩の火を見ていると、物質文明に毒された現代人にこそこの火は必要なのではあるまいか……と、そんな感慨にとらわれる。

やがて山伏は退場。こんどは上位先進で庫裏に帰り、ここで再び総礼をして大護摩法儀はつつがなく終了した山伏たちが去ると、参観者たちは結果の中にとびこんで松の葉を護摩壇の火の中に投じて身を浄める。

恒列のモチまきがはじまった。

煩惱を焼きながらいつ果てるともなく燃えている火の上を飛んで、白いモチが人々の頭上にアラレのように落ちてくる。

嬉々としてモチを拾っている老若男女の面上には、心なしか心身を浄めたあとのすがすがしさがあふれているようであった。

美しい時計をつくり続けてきました
 スイスで1791年から……

No.9015 ステンレス側 35,000円
 金 張 側 35,000円



ジラール・ペルゴ

永久に正確な時を刻むジラール・
 ペルゴ。香り高い芸術の気品
 をしのばせるデザイン。世界に誇る
 スイス時計の逸品です。

GIRARD-PERREGAUX

特約店
 **美甲時計店**

元町店・元町三丁目 TEL.331-1798
 三宮店・さんちかファンシー・タウン TEL.331-8798

●ブラジル独立150周年記念

新制作座第2回 ブラジル訪問帰国公演

於／神戸国際会館・12月18日 午後6時開演



フィナーレ後の真山美保団長のあいさつ



新制作座ブラジル公演のフィナーレ後の交歓風景（ブラジリアで）

真山美保さんの「新制作座」が、ブラジルで公演をするきっかけとなったのは、兵庫県出身の日系コロニア（移住者）である弓場勇さんの一通の手紙からだ。弓場農場では、そこで働く娘さん達にバレエを教え、労働と芸術が一体となっている弓場さんのバレエを実践してきた立場から「ブラジルの日系コロニアは今、文化を必要としている。それには人の心をゆさぶる演劇が必要だ。ここは処女地だから良い種をまかなくてはいけない。そのために真山さんの指導をおおきたいし、新制作座がぜひ来てほしい」という内容だった。初め弓場農場から三人が日本へ来て、芸術集団と生活集団の交流が地球の裏と表で始まった。次には新制作座から一昨年、二人が二カ月調査にブラジルへ渡ったが、日系人が七〇万人もいて驚いたという。去年の七・八月、泥かぶら」を持ってのブラジル公演は大成功。

そして今年は、ブラジル独立一五〇周年記念とあってフェスティバルの「人間万歳」を持って七、八月に、二十七カ所四十回の公演を行ない、はじめて真山美保さんも参加し、熱狂的な歓迎をうけたのだ。

この作品は、真山さんが人間で書くドラマ、劇場の中でつくりあげてゆく形式をとってフェスティバル「人間万歳」と名づけられた作品で、オーブニングはお江戸日本橋や荒城の月、ブラジル独立記念日の唄などで開き、一部は世界の唄、第二部は日本の四季をテーマにした叱られて、雪の曲（杵屋六郎助作曲）木曾節や阿波踊り、さくらなどを唄と踊りとお芝居でつくりあげ、フィナーレをブラジルのファベラ（貧民窟の唄）シラビマラビリョーザ（美しい街りの唄）オレレ・オクラなどを本場仕込みで見せるという構成だ。雪の曲にふる雪景色、月夜の海の場面など内容ともに風物が非常に喜ばれたそうだ。

神戸では、十二月十八日この「人間万歳」を帰国公演として上演する。神戸とブラジルは、移民基地でもあり日伯親善の交流は伝統的にも根強い土地。どのような日本を紹介し、またどのようなブラジルを吸収して、はつらつとした舞台を見せるか楽しみである。

世界の福祉施設ルポ〈21〉

ボランティア

ビューロー

橋本 明

シアトルの一番街とチェリー通りの間にある、ロウマン・ビルの中に「シアトル・ボランティア・ビューロー」がある。これはその名の通り、ボランティア、すなわち地域の中の社会福祉施設や病院、学校などで自分から進んで奉仕活動をする人たちのための窓口であるが、最近同じ名前のオフィスが日本の各都市にも設けられるようになったので名前だけのご存知の方も多いと思う。

このボランティア・ビューローとは一体どういうものであるかを知ろうと思つて私は十一月のある日、ロウマンビルの七階の一室を訪れた。

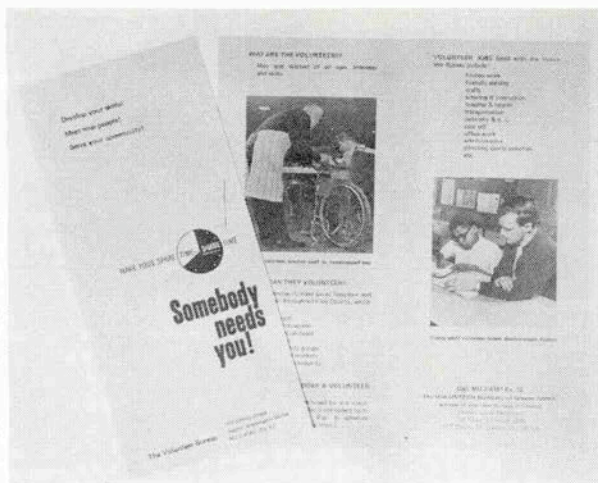
六畳ぐらいの小さな部屋には机とソファア、それに本棚ぐらいしかない。しばらく待っていると体格のいい、快活なジョアン・ラルセン夫人が部屋に入ると私に握手を求めて手をさし出した。彼女がこのディレクターである。非常に愛想がよく、人を引きつける魅力のある人だ。いろんなボランティア・ディレクターに会つてみて私が感ずるには、このラルセン夫人を初めてしてみているということである。数多くの多種多様なボランティアをオーガナイズし、思い通りに動かすにはやはり統率者たるディレクターには高い指導力が要求されるのであろう。

このラルセン夫人の説明によると、ボランティア・ビューローの役割は、簡単にいえばボランティアと各社会福祉機関の間に立つて両者の交流の調整をすることである。

ボランティアの募集や訓練などは各施設や病院で独自で行うこともあるが、それでは手間も時間もかかるのでこのボランティア・ビューローがそれをまとめて定期的に行い、一人一人のボランティアに合った施設を間に立つて紹介したり、施設が必要とするボランティアを斡旋したりする。ビューローでは双方のニーズに迅速に應ずるために、シアトル市内でボランティアを必要とする施設、学校、病院などの一覧表を作製し、どの施設でどんな仕事のできるボランティアを必要としているかが一目瞭然にわかるようにし、たえず双方のニーズを満たす努力をしている。

現在シアトル市内の約九四%の施設や病院がビューローを利用しており、その数は六〇%以上にもなり、働いているボランティアは五万二千人にもほのぼの。一口に五万二千人といっても、シアトル市の人口が約六〇万人だから十二人に一人は何らかの方法で奉仕活動に参加していることになる。今さらながら活動の層の厚さに驚くほかはない。ボランティアの主体はやはり学生と家庭の主婦であるが、六十五才以上の老人で余生を奉仕活動に生かしている人達も多く、半数以上の施設で老人がボランティアとして働いている。

日本でも家庭の主婦がこのボランティア活動をしたいという人が最近増えてきたが、どこに行けばそれができるのかいもくわからず、働きたいという気持はあってもそれを実行にうつせない人は多い。しかも日本の福祉施設や病院ではボランティアを受け入れている施設は少なく、あっても散発的なもので長期にわたるボランティアプログラムはもっていないのが実情といえる。したがって今後日本でこのボランティア活動をひろげていくためには、まず今述べたように働きたいという気持をもつ



「あなたを必要としている人達がいいます！」とよびかけるボランティア・ビューローのパンフレット

ていながらどこに行けばいいのかわからないでいる人たちが、すなわち潜在ボランティアを見つけ出し、彼らに適当な奉仕活動のできる場を紹介する「ボランティア・ビューロー」のような斡旋機関が必要になってくる。このビューローは単にボランティアを施設に紹介するだけでなく、幅広い広報活動、ボランティアの募集、指導、訓練、施設の専任職員に対する指導や監督を行ない、常に町の中の社会資源の動きをキャッチして、ボランティアが地域の発展に最大限に貢献できるよう、その機能をフルに発揮しなければならない。

次にボランティアを受け入れる施設側の問題であるが一方では奉仕活動をしたいという人達が多くいても、そういう人達を受け入れる施設がなければどうにもならないので、施設側としてもできるだけボランティア活動を施設の運営の中に組み入れていく努力をすることが必要になってくる。これは個々の経営者の経営理念なり、養護理念なりによって異論もあろうし、施設の種類や形態によっても違ってくるのでいちがいに押しつけることはできないが、長い目でボランティア活動が福祉の向上

に役立つであろうというプラスの面をかんがみて、施設経営のプログラムの中にさしつかえない限り取り入れていく努力をしていただきたいと思う。

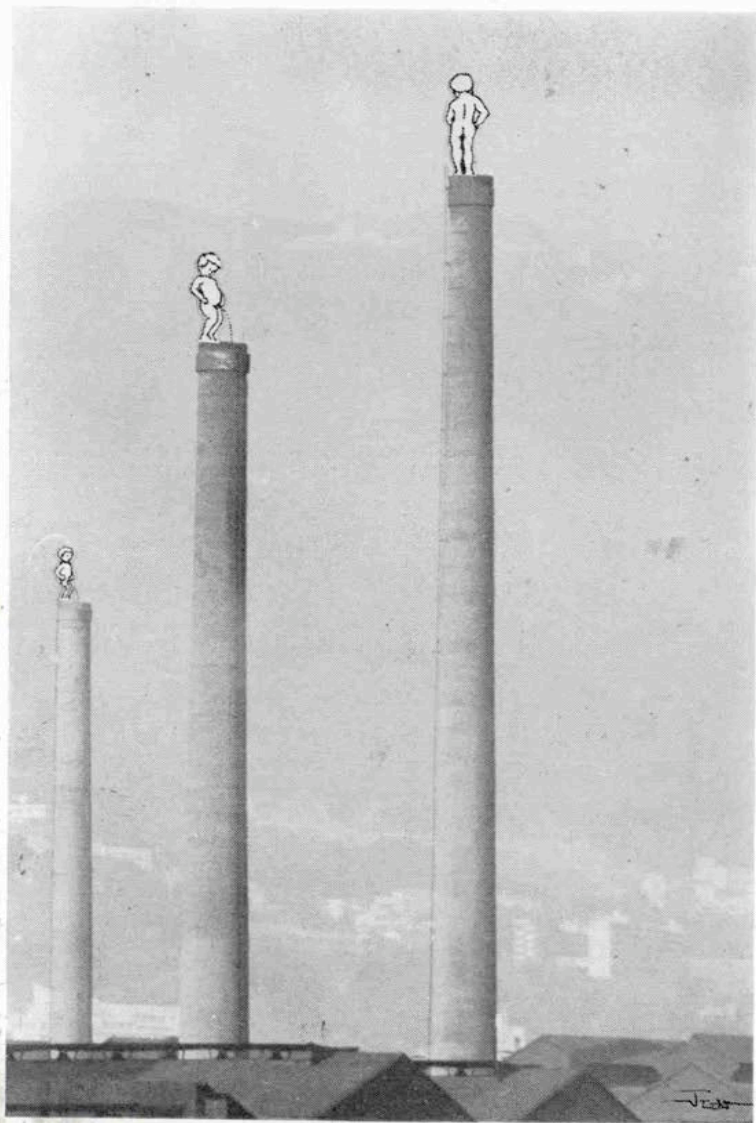
余暇時代を迎えて日本でも週休二日制の企業が増えつつあり、労働第一主義から余暇を楽しむ時代へと人々の価値感も少しずつ変わりつつある。家庭の中で、あるいは仕事の中で増えた自由な時間を利用して、一カ月に一度でもどこかの施設へ奉仕活動に出かけていく時間を日常生活の中にとり入れることができれば日本の社会福祉もだいぶ変わっていくことだろうし、人生の何時間かを障害者と共に過した経験はその人の長い人生に何らかの形でかならずプラスになるに違いない。

ヨーロッパのいくつかの国では結婚前のお嬢さんにある一定の期間施設や病院で奉仕活動することを奨励し弱い人達に接することによってお互いに助け合って生きることの尊さを学ばせるようにしている。こうした一種の花嫁修業は将来彼女たちが家庭の主婦となり、母親となった時、立派な家庭をつくるための礎ともなり、子供の教育においても大きなプラスとなっていく。

日本でもこのところ二、三の県の学校では社会科の実習として生徒たちに障害者の施設や老人ホームなどへ出かけていって社会奉仕活動をさせているところもある。

学校の正規のカリキュラムの中に社会奉仕活動をもつことに入れて、若い時から障害者や老人に接する機会をもつことは大切なことであるし、「社会福祉」という科目を授業の中に加えて基礎的な知識を教えていくということもこれからは必要になってくるであろう。

アメリカのように若者から家庭の主婦、さらに退職後の老人までもが生活の一部として奉仕活動を行うようになるまでにはかなりの長い時間がかかるであろうし、果して日本でそれだけの幅広い活動が可能であるかどうかはわからない。しかし、少くともこれからそういう方向への努力をつづけていくことは日本の社会福祉のレベルアップのためにも必要なことであろうと思う。

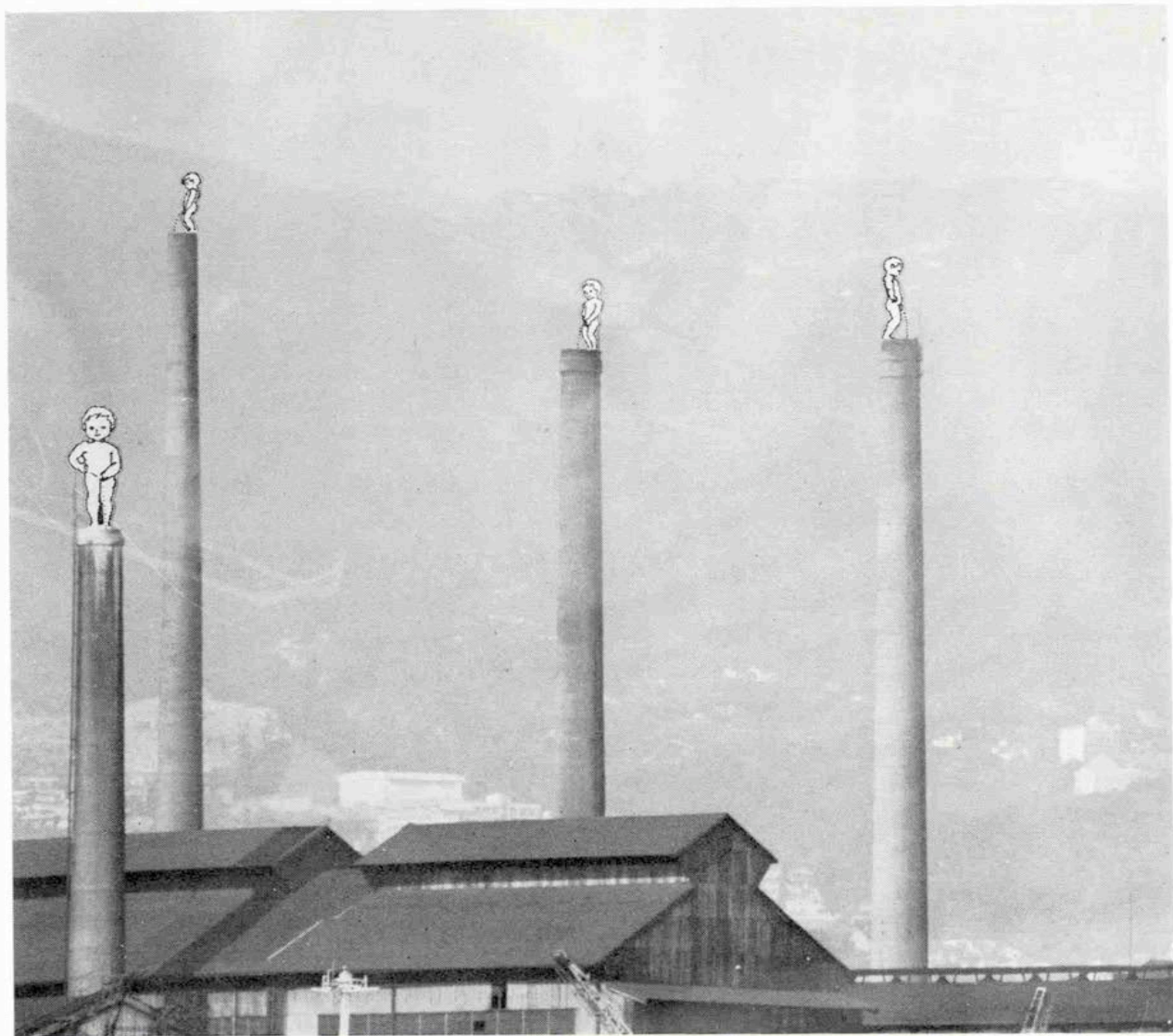


コラージュコミックス

〈12〉

工場街の煙突

岡田 淳



淀川立見席 12



この一年

淀川 長治

〈映画評論家〉

う。「おかしなおかしな大追跡」やフランス映画の香りを見せた「帰らざる夜明け」も捨てがたい。

思えばこの一年は多彩であった。「ニコライとアレキサンドラ」や「クイーン・メリー、愛と悲しみの生涯」も実力を示した歴史映画の秀作である。

これらの多くの作品で、チャップリンの「モダン・タイムス」(一九三六)が今に鮮やかに生きていることの偉大さ。

洋画のこの一年は見たえのある作品が珍らしく出揃った。「ボーイ・フレンド」「ラスト・シヨ」「愛のふれあい」が好きだったが、「フェリーニのローマ」「モダン・タイムス」「時計じかけのオレンジ」は尊敬という意味の佳作。「真夜中のパーティー」は黒いダイヤモンド。「ゴッドファーザー」はギャング映画のマイルストン。「フレンチ・コネクション」はアメリカ映画のシャープなタッチ。「フレンジイ」はヒッチコックのすばらしき話術の古典。「好奇心」はそのやわらかな映画文体。「キャバレー」はライザ・ミネリとあのグロテスクな司会者の輝ける芸人風情。「わらの犬」「死台のメロディ」は暴力と不正へのきびしい鞭。「ホスピタル」は非情非人間世界そのかくらん。「おしやれキャット」のデイズ・ニイ・クラシックと「スヌーピーとチャーリー」のアメリカン・モダン。「わが緑の大地」「大いなる勇者」「脱出」のきびしくも悲しいアメリカの肌。「ジュニア・ボナー」の西部牧童のサンセット。まだ思い落しの作品がある

をつかんだのであろう。

「ゴッドファーザー」は映画の歴史の中にあらゆる意味でマークをつけた問題作であった。映画そのものの良さ、これにはすこし疑問もないではないが、あの小説をこのように映画の中に生かしこんだわがは認めねばなるまいし、アメリカ映画がアメリカのイタリヤ移民のしかも暗黒の連中をかくも悲哀の目で見つめたことで、ここにギャング映画が持ち得なかった、あらたなる暴力への否定が、家族劇の中に語られたことで、これは大衆の心をつかんだのであろう。

愛のふれあい

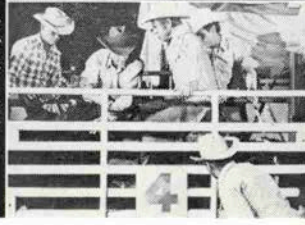
フェリーニのローマ

モダン・タイムス

時計じかけのオレンジ

ゴッドファーザー





フレンチ・コネクション

フレンジー

キャパレール

わらの犬

ジュニア・ボナー

私としては「モダン・タイムス」と「ボーイ・フレンジー」の二作が最も心を打った。私自身が映画の古典派ゆえであろう。「ボーイ・フレンジー」はすいぶんとほめすぎて、叩かれもしたが、やはりあれだけのダンスのムードを見せたダンス映画はそうあるものではない。けんらんたるダンスのノスタルジイ。

酔わされたのは「フェリーニのローマ」と「時計じかけのオレンジ」。美術とはこれであろう。

「フレンチ・コネクション」は、そのころ同時に相前後して封切られた「ダーティー・ハリー」とその力量を競い、その映画構成のたしかさでは「ダーティー・ハリー」が上をゆくであろう。しかし「フレンチ・コネクション」のいきさが勝った。「フレンチ・コネクション」には男の魅力がいかにも鮮やかだ。

これらの中からさてベスト・テンを挙げるとなると私にはまだ手が出ない。迷う。困る。

「フェリーニのローマ」「モダン・タイムス」「時計じかけのオレンジ」「フレンチ・コネクション」「真夜中のパーティー」「フレンジー」「死刑台のメロディ」「ゴッドファーザー」「大いなる勇者」「キャパレール」ここで打ち切れば「ジュニア・ボナー」がはみ出してしまふ。「ボーイ・フレンジー」はあくまでも私ひとりの好きな映画であって、ベスト・テンは映画構成上のつびきならぬ見事さの映画の計算というわけである。

好きといえば「少年は虹を渡る」も好きな映画。「暗殺者のメロディ」と「ひきしお」は特に見たかった映

画。そして見てじゅうぶんに楽しんだ映画。しかしベスト・テンの作品をあげるためにこの一年を思いかえしたときには妙なことにこの二作品は頭からはみ出してしまっていた。

もつともがっかりしたのはソビエト映画の「情熱の生涯・ゴヤ」だった。逆に思わざる収穫は「さらば美しき人」。そして「コッチおじさん」もジャック・レモンが監督したというところで嬉しく、ポール・ニューマン監督の「わが緑の大地」これはまた堂々たる本格の監督作品でニューマンの映画への趣味をあらためて私は讚美したくなったのであった。まだ思い出すと「愛の狩人」「恋」そして「さすらいのカウボーイ」「愛はひとり」もありましたね。

やがてベスト・テン選びの日も近い。今年のこの収穫に当って私は今から嬉しい悲鳴をあげている次第である。そして今年じゅうにまだ見る作品もあろう。すでに私はキャロル・リード久し振りの名作「フォロロー・ミー」が今年ぎりぎり年内登場の事を忘れてかけている。「フォロロー・ミー」の見事なるその演出力。いやこれは新春公開らしいから、はみだしても……かまわなかったのだ。

神戸遊戯誌111



▲嘉納 治五郎



▼田辺又右衛門

・前号で中島さんと山本さんの写真が入れかわっていました。

★神戸の誇り、嘉納治五郎と

田辺又右衛門

た功績に負うところすこぶる大である。

前回で日本柔道陣のミュンヘン・オリンピックにおける予想外の成績についての地元柔道家の反省談などを述べたが、これほど国際的に高まった今日のジュドー熱の最大の功労者はなんといっても日本講道館柔道の創始者である故・嘉納治五郎氏である。同氏こそ日本古来のあまたの柔術の流派を一つに総合して、さらに心技両面に近代的な解釈をほどこして全く新しい意味でのスポーツとしての柔道に結晶させた人であり、現代の世界柔道のいしずえを築いた人にはかならない。スポーツとしてだけでなく、戦後はレクリエーションとしてあるいは護身術として愛好者の幅をひろげ、全国各地、世界各国で盛況をきわめつつあるのも、氏がかつての武術としての護身術を体育としてまた人間完成の道としての柔道に高めた

この嘉納氏がわが神戸市の産（現在の酒造会社「菊正宗」の嘉納家の一人）であることは、神戸人のもって誇りとできるところだが、そもそも同氏が近代柔道の創設に活眼したのは明治初年のことだった。少年時代から東京へ出て早くも15才から柔道を習った彼は東大文学部を出た翌年の明治十六年二二歳で学習院の教師になったが、間もなく下谷の永昌寺の書院を借り受け、ここに住みながら数名の塾生をつのって私塾を開いた。ここで大学時代から習っていた天神真楊流や起倒流の柔術を塾生を相手に始めたが、彼はこれを嘉納流と呼び、講道館柔道と称した。この理由について数年後みずから「講道館柔道は古来の柔術を集大成し、形を変えて創造したものであるから、天下唯一にして、さらに源というべきものなし。後年にいたり、館員のうちより新機軸を出す者があれば、これ講道館柔道より一流を開くものであるから、講道館何某流と称すべきである」と宣言している。その

頃の門弟には、のちの「四天王」に加わる富田常次郎と西郷四郎をはじめ山県正雄、白藤文太郎、学習院の体操教師で相撲の強かった松岡寅男磨などがいた。明治二十年頃から講道館柔道はようやく世人の注目を集め、旧来の柔術家の嫉妬と敵対に抗しながらもついに国技の一つとして今日の隆盛を見るにいたったわけだが、これは一に嘉納翁の創意と情熱、超人的努力のためのものであり、また柔道が学校に随意科として、のちには正科として（終戦まで）採用されたことが大きな力となっていることはいうまでもない。

彼はまた明治三十二年を第一回にも欧米を旅して、柔道の普及につとめた。これはささやかな永昌寺でうぶ声をあげた柔道を深く研究して行くうちに、防禦術としてだけではなくその真理に人間の幸福を発見し、これを広く世間にひろめて、人類の福祉を計りたいという念願があったからであろう。従って柔道は世界的巨視から眺められることとなり、嘉納翁だけでなく幾多の先輩の海外渡航によっていつしか各国に根をおろし、「ジュードー」の名は海外に鳴りひびき、たれ知らぬものとなった。昭和五年フランスのバリで発行された「国際柔道」

にはじつに三十三カ国の柔道団体の組織や道場について記載されているが、これによってもいかに柔道が海外に進出したかがうなずける。とりわけ今日フランス、イギリス、オランダ、カナダ、アメリカ、ブラジル、アルゼンチンなどにおける柔道熱はすばらしく、フランスではファンの数は三十万人を超え、各地に道場が作られているほどである。このような状態だから、ミュンヘン・オリンピックで日本が重量級や無差別級で敗北を喫したことも、これほど長年の普及で青い目のジュードー家のなかにも強力な選手や大家がようやく現われ出した証拠として、日本選手の敗北を嘆くばかりではなく、あるいは逆に柔道の世界的成長のため内心喜んでいことも知れぬ。そういう意味では他界してすでに三十四年目になる嘉納翁もあの世からわが意図なれりとひとりほほえんで

いるかもしれない。

一方神戸における明治以後の柔術家（のちの柔道家）の動きについてみると、開港都市神戸は新しい寄り合い都市で明治以後急速に町づくりがなされたため、柔術家の住みついたのは明治中期以後に多い。それまでは柔術家の動きはあまりなく、園部一族という剣道家が明治初期から兵庫村東川崎の一隅で道場を構えていた。柔術家がめぼしい動きを示し始めたのは明治後期からである。不遷流の田辺又右門（岡山出身）、天神真揚流の小角弥三（徳島出身）竹之内流の藤田軍蔵らが、それぞれ市中に遷武館、直武館、精武館の各看板をかけて柔術の指導とけいこを開始した。なかでも田辺又右衛門範士の活躍はめざましかった。彼は明治三十年頃二十歳代で来神したが、はじめ永沢町三丁目に骨つき屋を開業すると共に同所に赤壁道場（のちの遷武館）を設けて柔道をひろめ出した。この人の柔道は天才的で特に寝わざが得意で当時の猛者連中と他流試合をしても絶対に負けなかった。試合の時彼は三歩しか歩かず、四歩目にはかならず相手を寝わざに誘いこんでいた。「講道館柔道の嘉納などにも負けんぞ」と豪語していたが、まさにそのとおりで、明治、大正兩代を通じてたびたび講道館の選手と試合をしても一度も負けたことがなく、地方型のよいところを柔道界のために残した。ついには自宅道場の床の間に「天上天下唯我独尊」の大掛図を誇らかにかけて日本柔道界をへいげいしたことは神戸柔道界の誇りだった。もともと岡山の古武道である拳骨（けんこつ）和尚の不遷流に習ってその三代目となったわけだが、先生は外に出ると羽織はかまにシルクハットといういでたちで雪駄（せつた）をはき、ステッキをついてまさに威風堂々と市中をかつ歩した。この異彩を放った姿も今は知る人も少ない語り草となった。からだはそう大きくなく、体重は若い時二十貫ぐらいたった。明治四十年頃諏訪山公園西麓にできた武徳殿の武徳会兵庫支部の教授となった彼の後期の活躍も忘れられぬところである。（四七・十・二三記）